
青春疾走

伊咲 知里

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

青春疾走

【Nコード】

N8693X

【作者名】

伊咲 知里

【あらすじ】

17の夏。あの頃の俺たちは無敵で、偉そうな大人にだってなんて勝てるかと信じていた。叶わない夢なんてない。そう、信じていたんだ。本気で。そう信じさせたのは、志間。お前だよ。

青春といえばやっぱり恋愛！ってなことで恋愛要素は入れたいなーなんて思ってますが今のところないです。あっても糖度は低めだと思います。また、更新は不定期です。

大人は狡い。狡猾で憎たらしく、大人になどなりたくなかった。
でも、どうやったって、時は平等に流れる。

「天ー、ここにいたのかよ」

「…何か用？」

でかいため息とともに嫌味のように言い捨てた。

「返事、聞かせてよ」

ニヤツと嫌らしい笑みを浮かべる。本能のままに顔を歪めて見やると、コイツは愉快そうに口角をあげた。

「なあ。もう素直んなれよ」

コイツ、志間 雄哉がわかりきったような顔で話すことにいつも以上に、無性に、腹が立つ。この世界の神だとも思ってたのかよ。

「…お前もモノ好きだな」

「お前がわかってないだけだよ。今にも死にそうなくせに」

くつくつと、人が嫌いそうな笑い方をする男だ。いかにも馬鹿にした笑い方に大袈裟にため息を吐き捨ててやった。

「とーにーかーく。…俺たちのバンドへようこそ」

志間が仰々しく両手を広げた。その向こうに見える真っ青な空が憎たらしいほど綺麗な青色で、目が眩んだ。

「…屋上で両手広げるなんて、恥ずかしいやつ」

視線を逸らして言ったが目の前の男が嫌らしく笑っていることは感じ取れた。

志間と初めて会ったのもこの屋上だった。俺はいつものように一人で寝転がっていた。BGMもいつも決まったあの曲で。

「なあ。それ『ペンギン』？」

大音量で聞いていたので、すぐに反応できず、変に間が空いてから「ああ」と答えた。

「マイナーなの聞いてんなー」

ニヤニヤ笑いながら言つ姿が少し頭にくる。無視して視線を外した。

「お前、名前は？」

妙に馴れ馴れしい男に警戒はしていたが、その馴れ馴れしさが続

くほうが面倒だと思い直し 「シノヅカ タカシ」 と答えた。

「ふーん。タカシってどんな漢字？」

「… 天気の日でタカシ」

「いい名前だなー。タカシっていつもここにいる？」

「… ああ」

そう応えるとコイツはパツと笑顔を見せた。それは、嫌な予感のする笑みだった。

「俺は志間 雄哉。俺のバンドに入らない？」

俺はコイツに関わったことを激しく後悔した。

「はあ？ お前、頭沸いてんのか？」

「探してたんだよ。いつもペンギンなんかマイナーな曲を気持ち良さそうに歌ってる奴を」

そう言つと、志間は意味ありげに視線を投げた。

だが、大音量で流して、申し訳程度にしか歌った覚えはない。

「… 人違いだ」

「ふーん。まあ、天がそう言うならべつにいいけど。それより、これ」

ポケットからアイポッドを取り出した。しかも最新の。

「これ聞いて」

「… 俺、別に音楽に詳しいわけじゃねーよ」

「いいから」

そう言つと無理矢理俺にアイポッドを押し付けた。

「それ、一週間貸してやるから、返事、その時に聞かせろよ」

俺の返事も聞かずに、言い終わるとすつと屋上から姿を消した。別に、聞いてやる義理なんてなかった。それは頭のと真ん中ではつきりと理解していた。それなのに、なぜかイヤホンを耳にしつかりはめ込んでいた。アイポッドには「No name」というアーティスト名が一組入っているだけだった。無駄な使い方に、これだから金持ちは…と悪態をつけながら再生した。

身体の中で存在感を示すかのような重低音。待つてましたと言わんばかりに後を追いかけるドラムの軽快なリズム。自分の心臓も一緒に奏でられたかのようにリズムカルに動いていた。

「くそ。こんなの一週間も聞けつてか」

呟いた自分の声が邪魔だ。呼吸の音さえも消えてほしい。そして、いつの間にか午後の授業をぶちしていた自分の素直さに笑いたくなった。

それから一週間、志間は姿を現さなかったが、一週間きつかしの今日、この屋上に現れた。

「天ー、ここにいたのかよ」

まるで、仲のいい友達かのように。

「で、お前の仲間ってやつは？」

「ああ、言っただけだったわけ？」

「知らねーよ」

吐き捨てると、またニヤツと口角をあげてから、俺の隣に座った。

「そろそろ来ると思うけど」

絵具で柔らかく塗りつぶしたような空に、暑苦しい熱気が身体にまとわりつく。息をするだけで身体から汗がわき出てくる。まるでエネルギーを身体の外へ放つとこころからねこぞぎ奪ってやろうとする気候に負けそうな一日。

「さっき連絡あったからさ。あ、天のアドレスも教えといてよ」

アイフォンをこちらに向けて、につこりとほほ笑む。その姿はこの暑苦しい夏にマッチしていて思わず溜息を吐き捨てた。

「暑苦しい男……」

そう言いつつ、ポケットから携帯を取り出してるんだから俺も大概だな。

入力してやろうと携帯を覗き込むとけたたましい音が鳴った。

「あ、わり。電話だわ」

そうやってアイフォンを耳にあてた。

「もしもし？ あ、今どこ？」

電話に夢中になっている志間を横目にもう一度アイポッドを起動させた。こんな空の下でイヤホンから聞くのがもったいない気がして、本体からイヤホンを抜き取りBGM代わりに流してやった。ヴォーカルはいない。ただのバックミュージックにはもってこいだ。だが、この高鳴る胸には刺激が強すぎる。

「a h a a a q a a a a a . n m m m m m m m . h u t o a
m f i l s j l y . x x x」

わけのわからないハミングで胸に突っかかる激しい何かを吐きだす。出鱈目な英語。

高校生がなんだ。大人が何だ。くそ。

「おい」

いつのまにか志間の仲間が数名、ドアから仰々しく姿を現していた。

「こいつがヴォーカル？」

一番前に偉そうに立った男が言い放った。すごく綺麗な顔つきが迫力に拍車をかけている。

「うん、そう。聞こえてたっしょ？」

それに負けじと飄々と志間が言った。ほんとに食えない奴。

「ああ。お前、名前は？」

「…篠塚 天」

「タカシ？ どんな漢字？」

一番前の綺麗な顔の奴の隣から人懐っこい笑顔で聞かれた。

「天気为天」

「良い名前だね。僕は平井 マサカズ。真の和と書いて真和。よろしく」

そう言って手を差し出されて、自分が厚かましく座っていたことを思い出し、すぐ立ちあがって手を取った。

「こちらこそ」

「ちょっとタカシ。なに？ その態度。俺の時と全然違うね？」

志間がしゃしゃり出てきたので、無視しようとしていたがマサカズが律義に返答した。

「いや、ユーヤは態度がでかいからじゃない？」

マサカズとユーヤが話しこんでいると綺麗な顔の奴が「俺は、坂野 ハルト。晴れに人で晴天。よろしく」と手を差し出した。

「よろしく」

「あ、僕は中村 アラタ。新しいの一文字で新です」

おとなしそうな雰囲気にもマッチした声色に心が安らいでいく。思わず微笑み返した。

「これでメンバーが揃った」

偉そうに、両手を広げて言うユーヤに残りのメンバーが大袈裟に溜息をこぼした。

「ヴォーカルは新しく加わったタカシだ。ちなみに俺はギター。マサカズはドラムでアラタがベース。ハルトはマネージャーみたいなもんだから」

くいつと口角を持ち上げるとユーヤは、大きな声で「レディースアンドジェントルマン」とさして発音の良くないカタコトで言い張った。

「ショータイムだな」

実に面白そうに笑いながらハルトが続けた。

こうして真夏のど真ん中で俺たちのショーが開幕した。

17の夏。

あのときの俺たちは向かう所敵なしで、どんなことだってできて、無敵なんだと思っていた。

偉そうに威張ってる大人たちにだって勝てると思っていたし、叶わない夢なんてないと思っていた。本気で。

「篠塚さん？」

名を呼ばれ、トリップしていた思考を呼び戻してから振り返る。

「大丈夫ですか？」

「あ、うん。ちょっとぼーっとしてた」

騒々しく騒ぐ団体の中で溢れる様に端に座り、酒とタバコを片手に眺めていた。何時の間にか隣に座っていた女の子が一体誰なのかもわからない。

「何か食べます？」

甘ったるい声と香水の香りが俺の鼻腔を燦るが、酒の入った体ではそれは不快にしか感じ取れない。甘い情事にはこの香りに酔うと言っのに。

「あ、いや……」

「秋穂ちゃん！ タカシなんてほっといいていいから、こっちで飲も

うよ！」

向かい側に座る男が、声を張り上げる。酔っているからか声のボリューム調節がうまくいっていない。それは最早こいつに限ったことではない。

「元氣、お前飲み過ぎだろ」

名は体を表すとはよく言ったものだな。

「飲み会来て飲まないでどうすんだよ」

真剣な顔付きで言い放つ言葉に、反論する余地は残されていない。仕方なく肩を竦め、すっかりぬるくなってしまうたビールに口を付けた。泡が舌にのる。液体よりも少し苦味が強く、舌触りは苦味が勝つがその苦味がなんともいえない芳醇さだ。

あの頃はビールがうまいと思えなかったし、酒に溺れずとも意識はいつも一つのことに関われていた。

「タカシ」

「なんだよ。お前の言う通り、飲んだだろ」

証拠を見せるように、ビールジョッキを掲げた。黄金に輝く液体の向こう側に見える元氣の顔はどこか切なさを含んでいる。

「…夏は暑いな」

隣にいる秋穂ちゃん、と呼ばれた女の子は「何言ってるでんすかい」と笑っていたが、俺はこいつの優しさに泣きそうになった。それを隠すようにビールを流し込む。

そうだ。

夏は暑いし、冬は寒い。

「そういえば、篠塚さんと元気さんって同じ高校だったんですよね？」

秋穂ちゃんは妙に勘が良いらしい。俺は苦笑せざるを得ない。

「ああ。タカシとは１７の時から同じクラスだよ」

「お二人はどんな学生だったんですか？」

秋穂ちゃんは場をつなげるためか、本当に興味があるのか、わからないがニコニコしながら聞いていた。それは俺にとって少し酷な話だ。元気と目が合った。

「そうだなあ。俺はすげえー人気で、年齢問わず女の子にキヤーキヤー言われてた」

「もう！ 冗談はいいですから」

クスクスと笑う秋穂ちゃんに「本当ですよ」と言おうとしたが、喉が何かに蓋され言葉となって出てくることはなかった。

「マジなんだって、これが。俺のモテ期はあの時がピークだな、うん」

「篠塚さんはどんな学生でした？」

覗き込むその綺麗な瞳が鬱陶しい。

その黒く輝く瞳が、深いところまで覗き込まれそうで目を背けたい。

「普通だよ、普通」

ごまかすように口元に笑みを作る。この醜い感情は出してはいけない。身体の中で飼いならせないのなら吐き出してはいけない。

「そんなことより、秋穂ちゃん。さっき部長が呼んでたよ？ 引き継ぎの話があるのかも」

「元気さん、そう言うことは先に言って下さい！」

慌ただしく立ち上がると、長いテーブルの端に座る部長の所へ小走りで向かっていった。畳の擦れる音が聞こえてきそうだった。この騒音の中だと言うのに、畳の温かみは消えない。

音があふれる。声と声の大合唱。皿と机が触れ合う音がアクセントとなる。

「タカシ」

元気の優しい声が俺の意識を呼び戻す。

「飲もうぜ」

泣き出したい気持ちとか、俺があ頃には戻れない現実だとか、何時の間にか酒がうまいと思えるようになったとか、いろんなことが俺の中でぐちゃぐちゃになる。それでも、元気が相変わらず優しいから。本当に泣きそうになったんだ。

…だから、お前はモテるんだよ。

なんだか癪だし、俺のちっぽけなプライド、と言えるほど大層な

ものではないプライドの端っこが喉に引っ掛かり、スムーズに言葉となつてこぼれてしまふことはない。

歳

俺たちが仲良くなるのに時間はかからなかった。それは、偶然か必然かと聞かれれば必然だったように感じる。

「タカシって歌わないと死ぬってホント？」

言い出した張本人に視線を投げかけると相変わらずのニヤニヤ顔をみせるだけで何も言ってこないのだから仕方なくため息を吐き出し、マサカズへ視線を戻した。

「べつに、そんな風に考えたことはないけど」

でも、と続けそうになって辞めた。そのニヤケ顔に同意するのは癪だった。

「強がんなよ。今にも死にそうな声で歌ってたくせに」

思わず笑ってしまった、といったユーヤの仕草にもう怒りは湧かない。もう、どうでもいいよ。

「でも今は歌えるんだろ？ だったら俺は別に死のうが、おかしくなるうが、どうでもいいよ」

半ば投げ捨てるように言い放つと、一瞬空気が止まるように反応が途切れる。蝉たちが思い出したかのようにわんわんと鳴き声を披露したので、我に返る。

「俺、タカシのこと本当に好きだ」

「悪いけどそういう趣味はないよ」

黒い瞳を潤わせたマサカズに申し訳なく思いながら断ると爆笑された。

「それは残念だなあ」

残念だなんて思ってもいないような声音が屋上に響いた。

「ボーカルも加わったことだし。ここはいつちょ、かましてやるか」

屋上でガラガラと寝転がっていると突然立ち上がり宣言した。それは嫌な予感しか感じられない。他のメンバーもそう感じたのか、なんの反応も見せず、ただ黙っていた。

「なあー」

俺に標準を合わせたユーヤがキラキラとした表情でこちらを覗き込んできた。その様子を見ていたマサカズが「始まったよ」とため息とともに漏らす。俺だって同様だ。

「聞きたくない」

素直に感情を言葉に乗せてみたものの、ユーヤは気にする様子を微塵も見せず、口を開ける。

「そう言うなって。すげえの思いついたんだ」

「お前のすげえはすごくない。ただの面倒事なんだよ」

「ライブしようぜ！」

俺の台詞も構わず、声高に宣言するユーヤ。

その宣言に馬鹿みたいに心奪われた残りの四人はポカンと口を開けていた。そのまま心臓を吐き出すことができれば、そいつは掌で華麗なステップを踏むかのごとく綺麗にリズムよく跳ねるだろう。そしてそのままお陀仏だ。

「ほら、心踊るだろ？ だろ？」

「……どこでするんだよ、どこで」

いち早く反応したのはハルトだった。こういうしつかりした所がかわれ、暗黙の了解でリーダーとなっている。それが、いいことなのか、悪いことなのかも暗黙の了解で黙殺された。

「そういうことはお前が決めるよ。俺たちは新曲の練習するからさ」

「新曲？」

「ああ。さっき思いついたんだ。まだアレンジが出来上がってないけど」

そついうと隣にあったギターケースからギターを取り出す。

「one,two」

ピックでコツコツとリズムをとる姿は同性の俺から見ても男前だった。

暑苦しい夏の真ん中で優しい音色が響く。その音色が空へと吸い込まれてしまう前に言葉を重ねる。

無意識のうちに。

「タカシって聞きようによっては騒音だよな」

歌い終わり気持ちの良い俺は機嫌が良かった。それに、歌うことの喜びが爆発すると、時として声量の調整がうまくいかない。そんなこと言われなくとも知っていた。

「ユーヤの言葉はいつも胡散臭いよね」

俺の代わりに言い返したのは、童顔で可愛いマサカズ。いまだって心なしか瞳が潤っているように見える。

「煩いよ、チワワ」

「ペテン師と犬は黙ってるよ。せっかく、余韻に浸ってたっていうのに」

ハルトの怒声を聞いても黙らず「ペテン師って酷くない？」と相変わらず減らず口を叩くユーヤにどうしようもないな、と呆れるが、声には出さない。

代わりにアラタに声をかけた。

「ドラムはうまくアレンジできそう？」

「うん。なんか歌い出しまでの盛り上がり欠けるからそこにドラ

ムを強めにいくよ。…ユーヤ、これ歌詞あるの？」

「ないよ。それはタカシ担当でしょ」

そんな話初めてきいたけど？

「ライブは学校でやりたいな…」

ポツリとこぼしたマサカズの言葉に、ハルトが反応する。

「それは無理だろ。こんな頭硬い連中にわかる音じゃない」

それでも。

この音楽を聞けば、大人たちにも響くと思っていた。

「ハルト。だったら、わかんないように演奏しよう」

言い出したのは俺だった。

あの暑苦しい気温の中、馬鹿みたいに屋上でこぼしたんだ。

憎たらしいほど青く澄んだ空とか、白くて存在感のある入道雲であつたりとか、そんな背景で俺は馬鹿みたいにこぼしたんだ。

「そもそもライブなんてやったことあんのかよ。いや、それよりも

今まで練習はどうしてたんだよ」

「…自主練？」

「素人じゃねーか！」

項垂れる頭をあげさせたのは、ハルトの一言だった。

「でも、今はできる」

そうだよ。

今はできるんだ。練習だって今からできるんだ。それに、歌う場所があるってだけでも最高じゃねーか。

「ライブって、どこでやるのー？」

「屋上かプールサイドなんてどうだ？」

ハルトは抑揚のない声で言い放つ。透き通るその声はすぐに青空へと吸い込まれ反応がでずにいたが、ユーヤのいやらしい笑い声が響き、時は動き出した。

「それはいい！」

両手を広げ、青春よろしく天を仰ぐ姿は他の奴がやれば寒くてどうしようもないはずの仕草が、ユーヤがやると決まる。それがどうしようもなく苛立つ。

「プールサイドって、音が職員室に漏れるでしょ」

アラタはやる気のない声で反論しているが、手元はリズムを刻みやる気を垣間見せる。

「前日の夜にプールサイドのフェンスにちよつとした仕掛けをし、姿を見えないようにするつもりだが、音は漏れるだろうな。でも、漏れなかったらただの練習とそう変わらないだろ。屋上はどうだ？」
「屋上から僕たちの声、届くかな？」

マサカズは黒目がちの瞳を潤ませて不安そうに聞く。その姿は女にもてるんだろうけど、男しくないこの空間には鬱陶しいの一言で片づけられる。

「甘えた声を出すな。鬱陶しい奴だな」
「ユーヤに言われたくないんですけど」

下唇をぬつと前に突き出す仕草も可愛らしいがユーヤを前にすると「やめろ、気持ち悪い」と一蹴されていた。

「屋上かプールサイド、ねえ。どっちも捨てがたいな」
「もう両方でやろうぜ」

マサカズとの言い合いに飽きたのか、マサカズそっちのけで宣言した。それには賛成だった。

「とりあえず、知ってもらうためにプールサイドで演ってみるか」
「プールサイドが俺たちのステージだなんて」

なんだか自分たちに酔っていると思われそうだな、と思うとつい苦笑を浮かべてしまう。

「最高だろ？」
「ソーデスネ」
「俺は準備に取り掛かるから、お前らは練習しとけよ」

かつこよく言い放つハルトに「任せたー」と思い思いに声をかける。その言葉を受け止めてからハルトは屋上を後にした。

それからハルトは準備に忙しいのか、屋上に寄り付かなくなった。どんな風にプールを囲い、ステージを作り上げるのか気にはなったが、そんなことより俺には使命、というには大袈裟か。宿題、が課せられていたのでそれどころではなかった。

勿論、歌詞だ。

「タカシー。歌詞できた？」

無邪気な表情を貼り付けたマサカズが教室まで様子をみにきた。マサカズと同じクラスのユーヤまでついて来る有様だったので、そんなに心配なら代わってくれ、という一言が口の一手前まで出かったが、飲み込む。

「いや、まだ」

曲調からイメージはなんとなく掴めている。それを言葉にするのは、なんだか気恥ずかしくもあり、畏れ多い。

「何だよ、照れてんのか？」

ニヤニヤといやらしい笑みを浮かべる選手権みたいなものがあればこいつはダントツ一位だろうな。

「タカシ。こういうのは照れれば照れる程クサイ歌詞になるんだよ？ 割り切りが大事だよ」

マサカズは大袈裟に頷いてみせてから「それに、誰もが通る道だから」と言つて肩に手を置いた。

「ま、俺は通っていないがな」

「ユーヤは気づいてないだけ」

自信過剰なユーヤを背後でから嘲笑うかのようにチャイムが鳴った。

いそいそと戻って行く二人を見つめた後、視線を窓の外へ移した。そこには、青空と白い入道雲、蝉の鳴き声、太陽の光が溢れていた。

「夏のはじまり、か」

駆け出したくなる疾走感。胸をつく躍動感。どれも夏にもってこいの音色だった。

安いB級映画のようだが、俺たちにはお似合いな気がした。そうだな。書き始めは、屋上での虚無感、なんてどうだろう。思わず口元を緩め、手近にあった大学ノートへ書き込む。

夏のはじまり、屋上、仲間、学校。

書きたいことは次々と浮かんでは消え、恥ずかしさと戦いながらなんとか一曲書き上げた。

歳

目の前に置かれているビールジョッキの側面に汗のような水滴がへばり付いている。それがまるで人間のようで少し不気味に感じるあたり俺は少し酔っているのかもしれない。

頭の端で水滴だと理解していてもなんだか気持ち悪く、横にあるお手拭きで軽く拭い、無理やり胃に流し込んでいると「篠塚さん」と呼ばれた。

「サークルの飲み会に参加してくれるなんて、珍しいですね」

弾む声を辿ると、そこには副部長となった後輩の矢守が酒を片手にニコニコしながらやってきた。その姿では、新歓の際に泣きながら「もう飲めません」と嘆いていたやつと同一人物とは思えない。

「息抜きに、な」

「就活どうですか？ 氷河期って聞きますけど」

矢守が隣に座る。畳の上には座布団が既にぐちゃぐちゃに散らばっていて、あるべきところになかったが、気にすることなく畳の上に直に座った。

そういえば、先ほどまで隣に座っていた彼女も座布団を敷かずに座っていたのだろうか、とどうでもいいことが頭を過った。

「ああ。凍りついてるよ」

「この暑さで溶けてくれませんか？」

だらしなく眉を下げる表情は相変わらずで、気を抜くと三年前の春を思い出してしまふ。あの時は春が満開で、なんて思い出話なん

かし始めたら俺は一体どうなってしまうんだろう。考えたくないのにさまざまな光景が走馬灯のように脳内を駆け巡る。追いかけてくる思い出を振り払おうともう一度ビールに口をつけた。

「面白くねーよ、矢守」

向かいに座る元気が意地の悪い表情を浮かべ、片手に持っていたビールジョッキをずいっと矢守へ押し付けた。矢守はそれを片手でかわし、顔をそちらに向け、しかたなくといった表情で返答した。

「そういう元気さんは、どうなんですか？」

「俺はもう決まったよ。春から営業マンに」

「それは、めでたいですね！ おめでとうございます」

矢守と元気の弾んだ声がやけに脳に響く。周りは相変わらずわけ散らしているというのに、ダイレクトに届いた。

…やめてくれ。

晴れやかな表情が眩しくて、目をそらしたい。皆前を向いて生きているんだと突きつけられているように感じる。

どうしようもない感情が肋骨の隙間を縫う様に這ってくる。

いやだ。逃げ出したい。こんな世界、もういやだ。本能のままに叫び出したい。が、そんなことは許さないと理性が律し、いつの間にか下唇を噛んでいた。

口を少しでも開けてしまうと、本音が漏れ出てしまいそうだった。漏れ出てしまわないように懸命に理性を総動員させていると「タカシ？」と元気の瞳が俺を捉える。

やめてくれ。そんな風に俺を見ないでくれ。

「…わりい、俺ちよつと酔ったみたい。外の風にあたってくるわ」

元気が引きとめようとしたが、それより先に立ち上がる。靴箱の鍵を手にし、暴れまわる奴らの合間を探し、出口へ向かう。後ろから名前が呼ばれた気がしたが、振り返ることはしなかった。

俺の人生、振り返ることばかりで大半が終わりそうなのに。

そう思うと、立ち止まることも、振り返ることもない今の状況が少しおかしく思え、口元が緩んだ。

そうだ。これでいいんだ。

なあ、そうだろ。ユーヤ。

酔いを覚ますために出てみたが、生温い風がぶわつと押し寄せ、眉を顰める。夏だということをこつと実感したくないとしみじみ思いながら、背伸びをして凝り固まった筋肉を伸ばした。夜だからなのか、セミの鳴き声はあまり聞こえない。セミの鳴き声が止んでしまつと夏の終わりを示しているようで、心のどこかに違和感が生じる。

そんなこと、今に始まつたわけでもないが、暑苦しい夏の始まりとセミの愛の悲鳴が聞こえなくなる頃、俺はいつだって泣き出したい気持ちが溢れてしまう。

誰か、昔の偉人が、青春は人生でのほんの一頁に過ぎない。残りの人生はそれを思い出すだけ、と宣っていたが、そんな仰々しい言

葉で知りたくなかった。体験だつてしたくなかった。できることなら永遠という時の止まりが起きてくれないか、と馬鹿げたことを考えてしまう。それなのに、大人になりたいと嘆ていたなんて。あの時の餓鬼をぶん殴ってやりたい。

お前らの命なんて、蝉と一緒に短いんだよ、知ってんのか、って。

「なにが、酔い覚ました。情けない」

酒臭いため息を吐き捨てると、生温い外気と一緒に溶けた。情けなくて情けなくて嫌になる。そしてこんな情けなくてどうしようもない日は必ず、最後のライブの光景がちらついて頭から離れない。

最後のライブ。それは、あの屋上で、俺たちはオーディエンスもなしに、ただただ空に向かって、勝手に送りつけただけのあつけないライブだった。空に向かって歌ったなんて言うത്オーディエンスを神に、想いを届け、なんて仰々しくて恥ずかしいことを願ったのではないかと邪推されそうで嫌だったが、それでも俺たちは屋上で歌った。

なんとなく、ただなんとなく、屋上から歌えばお前がいやらしい笑みを浮かべながら、でも瞳を輝かせながら「そうだろ？　そうだろう？」と言つてきそうな気がしたから、歌っただけなんだ。

もしかしたらしぶとい生き残りの蝉も聞いていたのかもしれない。そうだといいな。聞いてくれるやつがいるのならそれに越したことはない。

夏（前書き）

【連絡】

誤字訂正しました。

もいもいさん、ありがとうございました。

夏

出来上がった歌詞を眺めてみる。

悪くない。

小さく頷き、大学ノートから破ると小気味良い音が耳に響く。紙のちぎれる音は心地よく、好きだった。

出来上がった歌詞を片手に持ち、もう一度一行目に視線を落とすと『夏のはじまり』と書かれている。そこから始まる青臭い文章に恥ずかしい気持ちどこからか沸き起こるが、振り払うようにポケットから携帯を取り出し、メンバーに「恥ずかしい思い出ができた」とメールを作成し送りつけた。1分も経たないうちにユーヤから「屋上集合！」とメンバー全員に一括で送り返された。

「屋上でこれを公開？ 公開処刑もいいところだろ」

思わず、言葉をこぼしたが、歌詞を片手に屋上へ向かおうと椅子から立ち上がっている自分に苦笑する。なんだかんだ言っで、見てもらいたいんだろ、と内なる自分が嫌味を言ってきそつだ。嫌になるね、まったく。

屋上の扉をあけるとすでに全員がそろって突っ立っていた。

「珍しく早いな」

俺の嫌みに動じることもなくユーヤは無言で手を伸ばしてきたの

で、おとなしく出来上がった歌詞をに手渡すと、それまでおとなしく突っ立っていた他のメンバーがデカイ図体や細身だが骨張った身体を器用に密着させ、覆いかぶさるように歌詞を覗き込んでいた。その異様な光景に驚いていると遠くの方で予鈴が鳴った。

「チャイムってなかなかいい音で響くよな」

手持ち無沙汰となった俺は、誰に言うでもなくそう零すと、ハルトが律儀に顔をあげ「俺もそう思うよ」と同意し、また視線を落とした。

「いいじゃん」

最初に感想を述べたのは、マサカズだった。一言だけだったが、俺には十分すぎるほど嬉しく「ありがとう！」と柄にもなくテンションをあげて返答した。

「ああ。悪くないな。ライブはこのオリジナルとカバーを何曲か歌うか」

「カバーって？」

「別になんでもいいけど」

「じゃあ、ペンギンがいいな」

青臭い歌をあんなに透き通る声で歌えたら。どうせ、この歌詞だって恥ずかしいんだ。ペンギンみたいな青臭い歌を歌っても許される気がした。

「好きだねー。ま、歌うとしたらペンギンだろうなとは思ってたけど」

ユーヤはいやらしい笑みを浮かべてから手をパチンと鳴らした。

「そうと決まれば練習だ！」

やはり、仕切りはコイツなのか。不満を言葉にできる雰囲気でもなかったので仕方なく込み込み、代わりにため息を吐き出す。

「練習つて、どこで？　ここにドラムはないんだけど」

アラタも納得がいかないのか、珍しく本能のままに不機嫌な声を響かせた。

「音楽室は？　授業だつてあつてないようなもんだろ。選択科目な上に受講できるのは一年の夏休み登校時のみだなんて、ふざけすぎだろ」

俺たちの通う高校は、それなりに名の通った名門校で、中でも学力に力をいれていることが親からの支持を得ている。それに応えるように、学校側は大学受験への圧力を強くし、カリキュラムは体育、音楽といった副教科が異様に少ない上、割り当てられる時期が長期休みのみと生徒には不満の溜まるカリキュラムになっている。

「音楽室か。先生に許可をもらわないとだめだな。機材を移動してもいいとなればベストなんだけどな」

ハルトは考えがまとまっていなのか、ブツブツと発言にも満たない音を漏らした。

「とにかく、駄目元で聞いてみよう。音楽担当って常勤だっけ？」

ハルトが知っていそうなので、ハルトに視線を向けて尋ねたが、その隣の鬱陶しいピエロが「桜川 圭、28歳独身。3年前に赴任してきて女子生徒の人気を掻つ攫ったスカしたヤな男」と息継ぎなしにスラスラと紡ぎ、やつと息を吸い込んだと思えば、止まることなくまた口を開けた。

「性格と性に癖をもっている。性癖に関して、」

「いや、それはいいから」

つつこまずにはいらなかった。つつこんでしまった後、なんだかユーヤの思い通りの行動をとってしまったように感じ、俺は激しく後悔した。

「これから面白いのに」

にやにやとだらしく口元を緩めるユーヤを眺めながら、こいつはいつたい、どうやってそんな馬鹿馬鹿しい情報を入手しているのだろう、という疑問が頭をよぎった。

「そんなこと、どーでもいいから。早く音楽室行こうよ」

未だに機嫌が治らないのか、アラタは不機嫌そうに眉をひそめていた。

「さつきチャイム鳴っただろうが。あれは休み時間への至福の鐘の音じゃねーぞ。今から試練開始、の合図の音だよ、ばーか」

ユーヤから歌詞を書いた紙を奪い取ったハルトはもう一度「馬鹿ばかりだな」と悪態をついたが、口元は不自然に緩んでいた。そ

の姿がいつも澄ましているハルトから想像もつかないほど、年相応の可愛らしさをみせつけたので、目を奪われた。

「そうやってれば、格好良さに磨きがかかるのに」

嫌味ではなく本心で言ったのだが、マサカズがゲラゲラと下品に笑い声を響かせ、途切れ途切れに「それは、嫌味、なの？」とこぼした。

結局、昼休みになってから音楽室へ向かった。授業の間の休み時間では交渉には短すぎるし、放課後まで待てないという意見をまとめ、間を取ると昼休みが妥当だった。

昼休みまで音楽教師は音楽室に滞在しているか謎だったが、音楽好きな音楽室に籠る、というマサカズの意見に従った。

音楽室に入ると、大きなグランドピアノの前に男性が一人座っていた。その佇まいから男前であることは感じ取れ、この人が桜川圭か、と観察しながら、交渉するのはハルトだろうな、とぼんやり考えていたが、先陣をきって入室したユーヤが「ちよつといい？」と馴れ馴れしく声をかけたので、俺たち全員が天を仰ぎたくなった。そうだよ。こいつがおとなしく、黙って見守るなんて想像つかないんだ。交渉能力は甚だ疑問だが、仕方なくことの成り行きを見守ることにした。

「今じゃないとだめなの？」

グランドピアノから目線をそらすことなく、気だるそうに言い放

った。その雰囲気から、ユーヤがこの男をイヤな男だと見解するの
もあながち間違いではないのかもしれない。

漂うオーラから色香が垂れ流し状態で良い男といった風貌だが、
それが鼻に付く厭らしさを持つている男だった。でも、それが不思議
だった。こんな堅苦しい学校にこんな型破りな教師がいていいの
か、と。

「ドラムを貸してほしいんだけど」

「い、や、だ」

桜川はこちらに顔を向け、人の良さそうな笑顔を貼り付けて、は
つきりと言い放つ。表情だけ見れば、害のない好青年であるのに、
上品にちょこんとのった唇からは悪意の含んだ言葉しか出てこない。
なぜそこまで頑なに嫌がるのか不思議に感じるほどの拒絶反応だっ
た。

「志間に貸すのはなんか癪だし。ここで貸しを一つ作ってもいいけ
ど、お前は平然と忘れるからな」。何の意味もないよ」

言い切られた台詞に何の反論もできなかった。それは100%言
い切れる事実だ。

「ドラムはユーヤじゃなくて、俺が使うんですけど」

「中村が？ だったらいいよ。練習時間は決まってるの？」

あっさりと快諾した桜川にユーヤが不満をぶつけたのは言うまで
もない。

「できれば、授業もかつ飛ばして練習したいんですけどー」

マサカズがだらしく語尾を伸ばして懇願する。桜川の前まで詰め寄っていたユーヤがわざわざ振り返り、マサカズに視線を投じて「ぶりっ子すんな。気持ち悪い」と言い捨て、また桜川に嫌味とわけのわからない屁理屈を並べ始めた。

「授業に出るとまでは言わないけど、流石に君たちの青春に首をかけたくないからね。放課後と昼休み、それに早朝も使っていていいよ。それでなんとかして」

「早朝なんて音が漏れて苦情になりませんか？」

ハルトの礼儀正しい言葉が心地よく響く。

「大丈夫。ここ一応防音だから。早朝の方がみつかることは、そうないから存分に練習できるよ」

「遠慮なく使わせてもらいます」

「どうぞ、どうぞ。あと、放課後は僕も見学にきてもいい？」

目の前でユーヤが未だに何か言っていたが、桜川の発言を聞きすかさず「却下！」と叫んだがハルトは無視して「別に構いません」と答えた。

ユーヤはやつと諦めたのか、大袈裟にため息を吐き捨ててから振り返り「さ、はじめようか」と何事もなかったように仕切り直した。

それから、早朝、昼休み、放課後にオリジナルとペンギンのアレンジに日々を費やした。授業はまともに出ず、屋上でアレンジの話し合いをしたり、朝が早いための机の上でうたた寝したりと音楽に溺

れ死ぬような、そんな日々を過ごし、生きがいと輝きを感じていた。
これさえあれば、俺たちは無敵だ。勉強にヒーヒー言ってる周りの
奴が馬鹿らしく見えた。

夏休みまであと僅か。セミの鳴き声が右からも左からも聞こえて
きていた。

の（前書き）

高校生編 続きます。

の

夏休みに突入してしまうと音楽の授業が始まり、音楽室は使えない。が、授業でドラムは使用しないらしく、自分たちで持ち運び、使用後また元に戻せるのであれば使用しても良いと許可がおりた。しかも、授業の際、音楽室のドアや窓を開けておいてくれるらしく、アンプにさえ繋がなければ外で演奏しても誤魔化せると言ってくれた。その後押しもあり俺たちは屋上へ続く階段へ楽器を運び出した。本来ならば、階段なんて狭いところではなく屋上で演奏したかったが、さすがに炎天下の中、暑くなっていく楽器に触るのは辛かったからすぐに却下となった。

ゲリラライブは、夏休みが入り一週間経った全校集会の日と決めていた。

「静まり返った学校に俺たちの音が響き渡るなんて、最高だろ？」

提案者のハルトが企み顔で言った。それに興奮を覚えずにはいられず、つい口元が緩む。それは俺だけではなかったらしく、他のメンバーの表情を覗き込んでみても同じような表情をうかべていた。

「最高だな。俺たちの初ステージの客が全校生徒と教師達だなんて！」

中でも一番表情を崩していたユーヤが大げさに叫んだ。その姿はペテン師そのものだった。

「まるで悪役だな」

ハルトはすぐにいつもの冷静な口調と表情に戻ると冷たくあしらった。

「悪役のほうはまだ好感が持てるよ」

マサカズは肩を竦め、呆れたように言い放った。

埃くさい階段で蒸し風呂のようにじわじわと暑くなっていく空間。こんなところで、しかも思い切り歌うこともままならないこんな出来損ないな空間なのに、それでも胸は高鳴ってどうしようもない。これからはじまるショータイムに魅せられているかのように、踊る心臓に今にも叫びだしてしまいそうになる。

「はじめようぜ」

ニヤつきがとまらない。

早く歌いたくて仕方がない。

俺は異常な程興奮していた。ランナーズハイのようなモチベーションだった。

「ボーカル様の催促だ。いっちょ、演奏してみますか！」

ふざけたユーヤの口調も気にならない。むしろ、ショーの前説かのように感じられ、興奮すら覚える。

あたりに音が響く。早く歌いたいと喉が震える。前奏だというのに暴れ出してしまいそうだ。

「one , two , three !」

楽しくて仕方がない。

ライブ前日の放課後、辺りに人がいないことを確認してから楽器やらなんやらを運び出す。セッティングし、目立たないようにビールシートを上から被せるとタイミング良く桜川がプールサイドに現れた。

「お前ら馬鹿なの？」

発せられた言葉は冷たく、見下した言い方だったが、それがイヤミでないことを俺たちは知っている。目を凝らしてみると、口元が緩んでいることも確認できた。

素直じゃないのは大人の特権なのか？

「馬鹿かと聞かれると困るな」

全く困った様子も見せず、ユーヤが機嫌良く言い放った。それを横目に見ていたハルトはあからさまに顔を歪めていたが、特に何か言うつもりはないのか黙ったままだったので代わりに応戦する。もちろん桜川の味方だ。

「先生の仰りたいことは充分わかりますが、馬鹿なのはユーヤだけです」

「志間が馬鹿なのは聞くまでもないだろ？ お前らもついにイカれたのかって聞いているんだけどー」

相変わらずの気だるそうな言い方に苦笑を浮かべる。たしかに毒牙にやられてしまっているのかもしれない。

「うーん、どうだろう？ ライブってことで浮き足立ってはいると思うよ」

マサカズは顎に指を当てて考える仕草は媚びるているようで、その上声もなんだか耳に残る。が、その様子に慣れてしまった俺たちはもう特にツツコミをいれることなく受け流す。

「地面に足をつけるよ。プールの隣って職員室だろ？ 馬鹿だろ」

せつかく今まで貸してやったのに、と呟く桜川を前すると、問題の原因であるはずの俺たちだがつい同情してしまいそうになった。それほど落ち込んでいる様に見えた。

「全校集会の日だから、なんとかなるかと思って。まあ、ばれないとは思ってないよ」

「だとしても、わざわざそんな捕まえてくれと言わんばかりの場所で歌わなくても」

桜川はそこまでいうと大げさにため息を吐き出し、「ま、どうでもいいか。お前たちの青春だし。好きにしなよ」と興味を失せたように手をひらひら揺らし、プールサイドから出て行った。

その後ろ姿を眺めながら、そうか、これが青春か、とぼんやり思った。

「俺たちの青春、か。なかなかロマンチストだねー。桜川も」

にやにやといやらしい笑顔を浮かべ、鼻に付くトーンで話すのはもちろんユーヤだ。ユーヤは自分より目立ち、かつモテる男が嫌いなのか、桜川にいつもちょっかいを出していた。

「それじゃ、明日の流れを軽くおさらいでもするか」

「ハルトは俺たちが演奏している間、どうしてるんだ？」

ユーヤが俺たちに構わず話を進めていこうとしたので遮る様に声を張る。

「見てるよ。特等席で」

「それってどこなわけ」

「プールサイドだろ？」

「全校集会の会場だよ」

ハルトはなんでもないような様子で冷たく言い放つ。

「自分だけ安全地帯かよ」

ユーヤの呆れた声が、あからさまに響く。

「オーディエンスの反応は気になるだろ？ その様子をこっそり録画しといてやるよ。画が良ければPVに編集しようと思っている」

マサカズは興奮を隠しもせず小気味よい口笛が響く。それはとても綺麗な高音でも思わず笑ってしまった。

「最高だよ。早く明日にならないかな」

気づけばそんな恥ずかしい青春真っ盛りのような臭いセリフを吐

き捨てていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8693x/>

青春疾走

2011年11月18日11時33分発行